

第Ⅲ章 市民への大学開放の現状と未来

第Ⅲ章 市民への大学開放の現状と未来

1. 継続高等教育への関心

平成7年度に日本生涯教育学会は年報（第16号、平成7年11月）のテーマに「大学改革と生涯学習」を掲げた。

年報の中で、山田礼子「アメリカの継続高等教育の社会的機能—UCLAエクステンション・プログラムの事例分析を中心に」として、次のような趣旨の報告をしている。

本論の目的は、継続高等教育の代表例であるUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）エクステンションの事例分析を行なうことにより、継続高等教育の社会的機能、すなわち職業人に対する再教育機会と地域社会へのサービス提供という機能を明らかにするものである。本論は以下の順に従って進められている。①アメリカでの継続高等教育の歴史と現状を紹介する。②UCLAエクステンション・プログラムの事例を通して、その発展段階、組織の特徴、プログラム内容、学生の属性を明らかにする。事例分析に関しては、UCLAエクステンション副学部長、継続教育カリキュラム担当者、マーケティング担当者との面接調査、内部資料、過去のカタログ分析をもとに行なう。③上記の分析をもとに、総合大学を中心とした継続高等教育機関の社会での役割と機能、ならびに今後の課題を考察する。

筆者は次のようにまとめている。本論ではアメリカの都市部における総合大学の代表例であるUCLAの継続教育部門を事例として扱ったが、他のUCの大学、あるいは都市周辺の総合大学なども連邦政府の継続高等教育政策、職業資格に対する評価の社会での確立などから判断して、規模の違いはあるにせよ、継続高等教育の方向性は同じであると推測される。総合大学の継続教育部門は、大学本体の苦手な部門のプログラム開設、地域サービスなどを果たす補完的な部門であると同時に、高学歴職業人のニーズに迅速に応えた職業人への再教育機能を果たしているとまとめられる。しかし、受講生のニーズに迅速に応えられ、実質的なカリキュラムを達成できるということは、産業構造の変化や技術の進歩などの要因に大きな影響を受けやすいともいえる。そうになると、新しい産業技術を反映した実質的なカリキュラムを常に提供しなければならない宿命を継続高等教育は負っていることになる。その場合、実質的で最先端のカリキュラムに対し、いかに質の管理を行っていくか、今後注目する必要がある。

また、同じ年度の平成8年3月に発行された萩原敏朗他「ドイツ継続高等教育の基礎的研究」(東北大学教育学部附属大学教育開放センター)の趣旨は次のとおりである。

本文献は、本センターの「研究ノート・大学と社会」第29号、平成7年度の第2号として発行された論集である。本学部社会教育学講座の高橋満助教授やドイツの研究者からの寄稿も含めてまとめられている。本書の巻頭で、東北大学教育学部附属大学教育開放センター萩原敏朗教授は、以下の国際的動向をふまえ、本書の意義について次のように述べている。「今回の特集については、ドイツの継続高等教育について、きわめて詳細、緻密な基礎的分析とそれに基づいた研究報告がなされており、わが国における、この分野におけるこれからの基礎的文献になりうる内容である」。

萩原は、欧米の継続高等教育の状況について次のように述べている。19世紀の後半、イギリスを源流として世界各国に広まっていったUniversity Extension(大学開放、大学教育開放、大学拡張)の活動は、欧米社会では20世紀の早い時期から、むしろ、継続教育という言葉によってかわられていくという傾向にあった。たとえば、アメリカ合衆国では、20世紀の第一4半期が終わる頃から、University ExtensionからContinuing Educationへという方向で議論が展開されている。これは、大学自体の変質と深く関わっている。すなわち、University Extensionという言葉は、大学資源、大学の諸機能の大学キャンパス外への物理的な拡張、延長をイメージさせるものだったが、大学の巨大化、大衆化が進み、キャンパスの境界が次第にあやふやになるなかで、多くの大学開放機関は自らの看板として、University ExtensionよりContinuing Educationという看板を組み込んだ名称を使うようになってきたのである。また、ヨーロッパでは、中世以来、もともと大学キャンパスの境界があやふやな国々もあった。世界規模でみれば、大学がおこなう成人教育、生涯学習活動としては、職業教育制度の発展とあいまって、University ExtensionよりContinuing Educationのほうがむしろ主流であるといってもよいかもしれない。

さらに同年度6月の藤村好美「アメリカの高等教育機関と生涯学習 - "Continuing Higher Education" 概念の検討を中心に」(「日本社会教育学会紀要」31号、p73~82)の趣旨は次のとおりである。

筆者は1960年代のアメリカ成人継続教育について次のように述べている。コミュニテ

イ・カレッジ・ブームに代表されるように、成人の学習の場としての高等教育機関の役割が増大し、高等教育と成人継続教育の境界線が薄くなった成人継続教育概念転換の節目の時期であるといえる。本論では、1960年代から現在までを、アメリカにおける“Continuing Higher Education”（継続教育）概念の成立期ととらえ、高等教育機関がアメリカ市民の生涯学習に果たす役割を、“Continuing Higher Education”（継続高等教育）概念の観点から検討している。

筆者は、アメリカの高等教育機関において日常化している成人学生が存在と、それら成人の学習要求に柔軟に対応している高等教育機関の姿を、コミュニティ・カレッジや大学拡張部における教育実践に見ているが、その背景には、18歳人口の減少下のいわゆる大学の生き残り戦略としての成人学生の受け入れという経済的意味よりも、19世紀末の大学拡張運動以来連続と続いている高等教育と成人教育の融合とそれを支える理念を感じ取るという。そして、継続高等教育とは、成人の高等教育への参加を表す概念であり、また、高等教育機関の成人継続教育機関化・生涯学習機関化を表す概念であり、高等教育と成人継続教育の統合を表す概念に他ならないと述べている。

筆者は本論を次のようにまとめている。継続高等教育の源は英国の大学拡張であり、その理念が形を変えながらも今日まで連続と続いていることも再確認できた。しかし、かつて大学拡張が大学のマージナル（周辺的）な機能として行われていたのとは異なり、継続高等教育は成人継続教育を高等教育の主要な機能として捉え、高等教育と成人継続教育の新たな展開の可能性を秘めているものといえよう。アメリカにおける継続高等教育協会の活動は、成人継続教育研究において今後も注目に値するものである。

このように、19世紀後半のイギリスを源流とする大学拡張（university extension）が、市民に対する周辺のサービスとして「高等教育」を提供するというイメージがあるのに対して、その後いわれ始めた継続高等教育（continuing higher education）は、コミュニティ・カレッジ・ブームなどを背景とし、成人継続教育の本来的な場として「高等継続教育」を提供しようとする言葉だといえる。

本章では、最初に、その視点に基づき、前掲著『癒しの生涯学習』から、高等教育の根底的転換のあり方について述べることにする。

2. 高等教育の根底的転換

最近、大学がますます大衆化し、さらには今後の生涯学習時代に向かって、「継続高等教育」すなわち大学を本格的な生涯学習機関としてとらえなおす動きがある。しかし、他方、それが大学入学者人口の激減を目前とした大学側のただのサバイバル戦略にすぎないとしたら今までの大学の存在価値まで失うことになる。

◆ 現代人の生涯学習欲求の高まりの反映として

いまや高等教育（大学・短大）においては、学生の恒常化した私語によって授業が妨げられる、大学生なのに知的に幼稚であるなどのことから、大学の授業が存在する意味さえ疑う教員もいるほどだ。こういう高等教育の権威失墜が生み出された社会的背景としては、①従来の学歴偏重（高卒が大卒か、など）の価値観だけでは有為な人材を評価することはできないという社会的な認識が普及しつつある、②逆に学校歴偏重（どこの大学のどの学部の卒業か、など）の価値観は依然として残っていたり、あるいは場合によってはかえって強化されたりしている、という2つの理由があげられよう。だから、ごく一部の大学・学部の「自他ともに認めるエリート予備軍」を除いた大多数の学生が、「賢明にも」学士になるだけのための教育には、過大な期待や、その受け手としての自負をあまりもたなくなっているのだ。

そういう状況の一方で、現役学生を含めた多くの現代人のなかで、生きがい創出、自分さがしなどの自己実現や、職業、ボランティア活動などの社会的役割遂行のための切実な学習欲求が、急激な広がりを見せつつある。これらのニーズ全体が、生涯学習社会形成に向けた社会創造のパワーとしてふくらみ始めているのである。そのふくらみは、革新のない過去の高等教育が色あせていく道程と、あたかも反比例するかのような目覚ましきである。生涯学習関連事業の実施のなかでそういう人びとの猛烈な学習欲求に接している大学のほうも、新しい出会いと気づきの体験による自己革新をしている最中である。

こういう大学の革新によってこそ、従来の学歴偏重社会のエリートを育てる方向ではなく、「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させる」（学校教育法第52条「大学の目的」、短大は若干異なる）という本来の方向での高等教育の根幹部分の進化・発展も可能になる。つまり、大学の枝葉の役割としての狭義の生涯学習関連事業だけでなく、高等教育全体のあり方が生涯学習社会の形成というフレームのなかで考え直されなければならない時期にきて

いるのである。

◆ 市民の高度化・多様化する学習ニーズへの対応を

生涯学習あるいは成人の学習の特徴として、自己管理型学習（self-directed learning）であるということがあげられる。すなわち、みずからが学びたいと思うこと（欲求中心の即目的学習）や学ぶ必要があると思うこと（課題中心の問題解決学習）を、学びたい手段で学ぼうとするのである。大学の生涯学習関連事業もそれに対応しなければならないのは当然であるが、その場合、これらの市民の学習ニーズの高度化、多様化に留意する必要がある。

たとえば大学公開講座では、その生成期においては、「一般市民のため」という名目のもとに、市民に対しては高等教育としてのレベルを根本からないがしろにしたり、「教員の公平な分担」という名目のもとに、テーマの焦点化されていない総花的で非体系的なプログラムに陥ったりする傾向があったようである。しかし、最近の公開講座は、高度化する市民の生涯学習ニーズに応じて、本来の高等教育機能の拡張としてのレベルの高い公開講座を志向する大学が増えている。

今後も、学習者層の拡大のためには、入門的で広い範囲の親しみやすい学習内容の提供が必要ではあろうが、大学側がそれだけに甘んじていて、市民の高度化、多様化する学習ニーズに対しては、人がたくさん集まらない、手間がかかる、などの消極的な理由から対応できないまましていると、その事業を大学が行っているからこそその魅力を失い、よって、深い意味での学問の楽しさをも失って、いずれは市民から見離されることにもつながりかねない。

◆ 市民の潜在的学習欲求の顕在化のための学習内容・方法の開発を

数的に多くの市民がアンケートなどで学習したいと回答したテーマや、市民が実際に学習活動を行っているテーマを追うだけでは、市民の顕在的な学習欲求に後追いの対応する結果にしかならない。人びとが学習して初めてその学習の本当の魅力に出会えるようなチャンス、すなわち潜在的学習欲求の顕在化の場として機能することが、大学公開講座のこれからの課題である。

市民の高度化、多様化する学習ニーズを鋭敏にとらえるためにも、この潜在的学習欲求の重視の視点は欠かせない。潜在的学習欲求も視野にいれるからこそ、人間の学習ニーズ

は無限の可能性をもっているといえるし、大学も教育主体としての存在意義をもつのである。その方向は、大学公開講座の実施においては、先に述べたように、本来の高等教育の機能を、しかも、日々進展する生涯学習社会に適合したかたちで市民に提供する方向と一致すると思われる。

そのためには、学習者がよりいっそう主体性を獲得できる方向での学習内容と学習方法の工夫が必要である。少なくとも一斉承り型学習と抑捺されてもしかたないような非主体的なマスプロ講義は最少限度にとどめるなどのセンスが求められている。このようにしてこそ、大学は、今後の生涯学習社会のなかでの高等教育機関としての自己の教育的力量が世間からも認知されるのである。

◆ 高等教育の制度等の柔軟化と個性化を

過去の学歴偏重社会においては、固定的な年代や時期の、固定的な一定期間の、固定的な場で行われる高等教育に重きがおかれ、それ以外の学習や卒業後の学習には比較的、関心が払われてこなかった。しかし、今後の生涯学習社会においては、社会の変化や進展に応じて、卒業後も繰り返し教育の場に立ち返って学習（リカレント学習）を進めることが求められていることから、大学の側もそういうニーズにいっそう柔軟に対応していく必要がある。これが継続高等教育機関としての大学の役割である。

このことに関連して、2つの重要な生涯学習の観点を述べておきたい。それは、①人間には生涯の各時期に応じた発達課題があるのだから、なるべくその時期を逸しないようにして、それぞれの時期の課題に適した学習を行うことが望まれるという観点、②人間は一生のあいだ、さまざまなかたちでつねに変化・発達を続けることが可能な存在であるのだから、生涯学習は気づいたときにいつからでも始めることができるという観点、である。従来、とくにあらたまった論議などでは、ややもすると①ばかりが強調され、生涯の各時期における発達課題が固定的に受けとめられてきてしまった傾向があったのではないかと、大学側が本音のところではそういう前者の考え方だけに固執しているのだとすれば、せっかく大学の扉をたたいてくれている社会人や大学既卒業者は救われまい。「思い立ったが吉日」「人生、すべて勉強」などのごくあたりまえの庶民感覚を大切にしなければならない。

◆ 市民・学生のための大学からの情報発信と、大学へのアクセシビリティの確保を

現在、欧米では大学拡張と呼ぶより継続高等教育と呼び、生涯学習機関としての自らの役割への自覚をますます高めている。大学の生涯学習関連事業においても、学習者中心のサービス姿勢を徹底することが今後の重要な課題となろう。いまや多くの大学が施設開放を行っており、大学の市民への開放性の高まりを感じさせるが、その開放性がどれだけ市民の実際のニーズとマッチしているかについては、まだまだ覚束ない大学のほうが多いのではないだろうか。「大学教育に支障のない限り、自由にご利用ください」という姿勢も発展のひとつだろうが、生涯学習の時代はそのつぎの段階への発展を大学に求めているのである。それは、届ける、触発する、という姿勢である。

校舎や体育館やグラウンドなどの施設はまさか「届ける」というわけにはいかないが、大学を訪れたいと思った市民がどれだけ容易に目的地に到達できるか（アクセシビリティ）を配慮する精神が求められる。車のない人はどうか、お年寄りはどうか。また、車椅子でも、大学の玄関から2階の開放している図書館に上れるだろうか。さらには、バス停を降りてから大学の玄関までの歩道はどうなっているか。居合わせた自校の学生は、お手伝いするだろうか。こういう心配りをするをオープンマインド（開かれた心）というのである。全国的にもエクステンションセンターの名称などで、市民開放用の施設を大学の立地とは別に街中に設置する同様の動きが見られるが、最大限のアクセシビリティのための試みとして評価できる。

◆ 市民・学生の学習成果への評価と、市民・学生からの事業・授業への評価を
とくに「きびしい生涯学習」については、どうしても高等教育の過去のイメージを引きずってしまい、市民側も大学側ともに、教える側の制度化された権威が至上のものになりがちである。そして、「学びたいから学びたいことを学んでいる」という自己責任の原則が忘れ去られ、市民側の学習態度を依存的なものにしてしまうのである。これでは、生涯学習も、過去の教授者主体の「一斉承り型学習」とあまり変わらない非主体的な学習という結果になってしまう。

もちろん、大学卒業資格や単位の取得という学習結果の存在意義を全否定することはだれにもできないだろう。しかし、生涯学習社会への転換において大切なことは、そういう資格・単位の認定に関わる制度的な改善をも含めた評価の適正化である。学校歴に偏るこ

となく、学習歴を問わなければならないし、また、単位や資格の取得を争う大人同士の受験地獄にしないためには、学習結果としての学習歴にも偏ることなく、一人ひとりの多様な個性と持ち味のある学習の経過をも尊重しなければならない。

さらには、学習成果の評価についてのより本質的で積極的な意義としては、何よりも学習者本人がつぎの学習行動を主体的に決定するために不可欠であるということがあげられる。それゆえ、適正な評価のためには、アンドラゴジー（大人への教授法）の考え方に則り、ガイダンスやコンサルティングなど、学習者と援助者との相互的な営みが必要になる。したがって、生涯学習関連事業においてなされるべき学習成果の評価のあり方を検討することは、従来の高等教育は学生の主体的な学習能力の向上を本当に評価できていたのか、社会教育は市民みずからのもっていた学習目標の講座修了時の到達の成否に関心をもっていったのか、というように、自らの教育姿勢への鋭い問い直しにもなるのだ。

以上に述べた学習成果の評価にならんで、大学教育への評価も重要である。今まで学習者側からはほとんど批評を受けることなく過ごしてきた高等教育にとって、学習者主体の生涯学習とその支援の理念は、自己評価の充実の面でも大きな契機となるだろう。18歳人口の激減を目前にして、多くの大学でサバイバル（生き残り）をめざして自己点検・自己評価活動の取り組みが行われている。しかし、もし18歳人口が減る見込みがなかったら、そういう活動をしなかったのか。それも、「大学の自治」の名のもとに。大学の自治とは、ときの権力の干渉を許さず、しかし、学習者や世間の評価も参考にして、教員が厳しく自己点検・自己評価を行うという前提があるからこそ成り立つことではないか。大学は自己評価することを自己決定すべきである。

もちろん、たとえば、「〇〇先生はやめたほうがよい」と一人に書かれたからといって、必ずしも、つぎの事業からはその〇〇先生を依頼しないようにするというのではない。学習者からのこういう事業評価に対して事業者は、「少なくとも、この回答者はそう感じた」という事実を逃げずにありのままに受けとめ（受容）、そのうえで主体的に判断すべきなのである。とくに、大学の授業を学生に評価させる場合などに教員の抵抗が強いのは、相手からの評価のこういう受けとめ方について、まだ理解が十分には広まっていないからなのではないか。教育側と学習側の相互の批評は、否定ではなく批判であり、主体的な両者の基本的信頼のもとづく協働の知的共生活動なのである。このように、市民や学生からの評価を率直に受けとめてこそ、大学の主体的な自己評価は可能になる。

学習側が教育側を批評するということは、自己管理型の生涯学習にとっても非常に重要

なことである。学習者が事業評価や授業評価をするということは、学習者が学習者自らの責任を果たすということである。かれらの否定ではない批判は、主体的な学習態度の一環であり、ともに生きる（共生）ための信頼と共感にたどりつくまでのプロセスである。その批評を誠実に積み重ねることによって、学習者の主体性もいっそう確かなものに育っていく。つまり、事業・授業評価は、大学と市民・学生がともに育つための共育活動の一環なのである。

◆ 学内に全体的・総合的な生涯学習推進組織を

学内の推進組織自体は大きかりでなくてもよいが、大学の総合的な経営のひとつとして専門的に関わられる位置づけをする必要がある。企画や調整というラインのひとつとしてか、あるいは、いずれかのセクションの下に置くのであれば、そのラインからやや外れて独自の実行機能を持ち、ほかのセクションに対しても全体的に調整力を行使しうるスタッフ機能として位置づけたほうがよいと考えられる。

学内の生涯学習推進組織または窓口をどう整備するかということは、来たるべき生涯学習社会に向かつての大学経営全体の基本的・総合的理念を表すものであり、企業のＣＩに匹敵するほどの大学のアイデンティティそのものに関わる重要なことがらなのである。

◆ 他大学・他機関との生涯学習ネットワークの形成と地域生涯学習推進計画の実現を

大学どうして、あるいは行政等の他機関と、さらには地域社会全体と、ネットワークを形成することが生涯学習推進事業を行おうとする大学には必要である。まずは、さしあたり、他大学、放送大学や専修学校との単位互換を考えるべきであろうし、研究や生涯学習推進の面などでの企業との連携も考えられよう。そもそも大学が市民にも目を向けるということは、基本的にはこのような他大学、他機関、地域社会に対して自信にあふれたネットワークマインドをもっているからこそのことである。

ネットワークの特性のひとつは、自立と依存の統合的發展であると思われる。大学としての独自の存在意義をもっているからこそ、異なる自立的価値をもつ他者と対等に連携することができるのだ。また、そういうネットワークにおいては一方的な関係ではなく、相互のギブ・アンド・テイクの関係が成り立つ。たとえば、大学は行政や地域に対して有益な学園都市の資源としての存在価値を発揮し、行政や地域はそういう大学を信頼し支えようとするのである。このような双方が対等で主体的な協働の関係が、大学の生涯学習ネッ

トワークには求められている。

◆ 生涯学習理念にもとづく大学の自己革新を

以上述べてきたことをもとにして、「生涯学習時代における大学の役割」をばくの生涯学習に関する基本的な主張を交えて簡潔にまとめていうとすれば、つぎの3点になる。

① 生涯学習社会を担う学生を養成する役割

—学内で生涯学習を学生に—

現代青年としての学生は、生きる主体性の喪失の危機に瀕している。保護と管理ばかりを学校、家庭、社会から与えられ続けてきたことによって、学習やコミュニケーションなどにおける自己決定、自己管理、自己責任の能力がかなり損なわれているのだ。生涯学習の観点からして学生の主体的学習を支援し、自己管理能力の向上を促すことによって、かれらを今後の生涯学習社会を担う人材として養成することがこれからの大学には求められている。

② 社会の変化を先取りし、リードする役割

—学内の高等教育を学外に—

急激に変化する現代社会は、つねに自己革新を続けて時代を先取りするリーダーとしての役割を大学等に求めている。とくに職業人は、知識・技術等の急激で高度な発展のなかで、学校卒業後も繰り返し教育を受けて今日の到達点を学び直すリフレッシュ学習の必要を感じている。また、高等教育とは別の形態としての生涯学習関連事業においても、時代のつぎの方向を示す役割が大学・教員に求められている。

③ 「癒しと発達」の市民の学習を支援する役割

—学外の生涯学習を学内でも—

成熟化する現代社会においては、人びとの関心はモノからココロに移りつつある。そこでは地位や財産をもつ (have) ための学習より人間らしくある (be) ための学習に価値がおかれる。そのため、癒しと発達の両方が求められる。その学習は、生涯にわたって行われるリカレント学習である。これに対する大学の支援が大いに期待されるとともに、そういう市民の生涯学習との出会いは、大学にとっても学内に吹く「生涯学習の新しい風」

として重要である。

多くの大学で生涯学習関連事業が積極的に取り組まれつつある。しかし、その努力が、迫りくる18歳人口の激減に対しての大学サバイバルのための対処療法的な延命策としてだけに終わってしまう大学があるとすれば、それはたんなるサバイバル・ノイローゼの一過性の症状でしかなく、生産的な結果につながらないことは容易に想像できる。もっと、何のための大学か、何のための大学拡張なのかという、大学の本質的な存在確認から事業を発想する必要があるだろう。

ゆえに、大学の生涯学習化（生涯学習理念にもとづく自己革新）の成否は、学内の教員と職員の意識変革にかかっているといってもよい。「儲けたいとは思わないけれども、かといって、大学がつぶれてしまうのも困る」という消極的な守りの経営や、過去の最高学府という空洞化した「権威」への依存から脱却して、主体的学習の支援という大学の社会的な役割を、より時代にあったかたちで遂行し、そのことによってみずからもその役割を味わい、喜ぶ、積極的な攻めの経営に転換する必要がある。これが大学の経営革新の姿である。

最近のまともな企業は、収益を上げるだけでなく、その他の社会貢献活動（フィランソロピー）や文化支援活動（メセナ）などにも積極的に取り組むようになりつつある。これに対して、大学においては、教育（学習援助）をとおした社会貢献や文化支援という活動は、幸せにもそもそも本来の責務である。だからこそ、私学に対しても、やや貧弱とはいえ、国民の税金が支出されているととらえるべきだろう。ただし、そういう大学の新しい責務の遂行とそのための革新は大学の自己決定によるべきものであるし、それゆえ、惨めなサバイバル・ノイローゼなどとは異なる、自信に満ちた営みでなければならない。大学の変容も、個人のレベルでの学習行為と本質的にはまったく同じ経緯をたどるものであり、自己管理型の生涯学習のなかで個人がワンダーランド（わくわくできる世界）と出会うのと同様に、大学も自己管理型の生涯学習化のなかで自己変容という本来の学習の楽しみと出会うことができるのである。

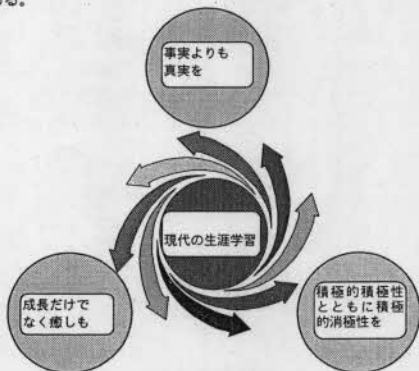
自己決定活動の真の動機は「自分のため」である。たとえ指導者が研修を受ける場合でも、「学習者のため」ではなく、「自分のため」といえる人が、学ぶことの意味を知るよい指導者である。また、ボランティアについては別に述べるが、他の人から「えらいですね」とか「奇妙な方ですね」といわれると、嫌な気持ちになるものだ。そういうときは

「自分のためにやっています」と答えればさわやかでいられる。自分で「ボランティアをやっています」と言い切る人はあまりいない。それよりは、「こういう活動をやっている」と具体的にいうだろう。ボランティア活動は、ボランティアになるためではなく、何かをするために自己決定したものなのだ。ただ、ボランティア活動をしているある学生が、あまりつきあいのない友達に、自分が何をやっているのかを手っ取り早く答えるためには、ボランティアは便利な言葉だといっていたが……。いずれにせよ、人目ばかり気にする横並び意識や自己卑下のサバイバルと違って、自己決定・自己管理型の自己変容は人間にも大学にも気持ちのよいものである。

3. 高等教育内容 7つの転換

上下同質競争の頂点をめざすための「最適な手段」としての過去の陳腐な教育内容はそのまま、それを少しだけ市民にも開放するという程度の改革だけにとどまるならば、大学は生涯学習社会の形成には貢献できない。教育内容自体が転換されるべきだ。しかし、時代は高等教育内容にどんな転換を求めているのか。

一つに、本提案は、この図に示されたばかりに考える生涯学習の観点のもとに述べられていることをあらかじめ述べておきたい(図表1)。つぎに、したがって、市民に対する「継続高等教育」の内容についても、いっそう同様の趣旨が実現することが望ましいと考えるものである。



図表1 生涯学習の再定義

◆ 転換1－自己決定・自立支援型にする

成人の学習の本質は自己管理型学習である。高等教育もこれに習い、「学びたいことと学びたい手段を自分で決定して学ぶ」という原則をできる限り取り入れる必要がある。

ばくの授業では、出欠、遅刻、早退、途中入退室、そしてめぐりも、すべて自由ということにしている。個人には個人の事情と個人のレディネス（準備性）があるからである。ばくの責任は魅力的な授業をすることであり、他の用事をさしおいてもその授業を選ぶかどうかは、ばくの責任ではなく学生が自分の責任で決めることではないか。

私語の問題ひとつをとっても、教育が学習者に自己決定をさせてこなかったがゆえの学生の主体喪失状況は背筋が寒くなるほどである。これ以上、学生に「こんなつまらない授業なのに、出席ばかり厳しくとるんだから」などと思わせてはならない。それは、結局、他者や社会のせいにして安定しようとする学生を、内面から許し、甘やかせていることになるのだ。教員は授業にいっそう勝負をかけて着席を自己決定する学生を増やし、そのうえで、退室の自由を行使できないままおしゃべりする学生に、その不行使が本人の自己決定以外のなにものでもないことを知らしめなければならない。

◆ 転換2－双方向・水平交流型にする

教員の楽しみは学生一人ひとりの「個の深み」との交流にあると、ばくは思っている。とくに、学生が自由に書く出席ペーパーのおかげで、授業がかなり刺激的な仕事になっている。過去の方通行の講義型授業だけでは、教員も学生も手応えに欠ける。

大学の自己点検・自己評価の動きのなかで、学生に教員の授業を評価させる試みがいくつかの大学で生まれている。よいことだとは思いますが、それがたんに人気度や教育技術を数字で表すだけのものであるなら高等教育とはいえないだろう。社会教育・生涯学習がアマチュア学習者とプロフェッショナル学習援助者との相互的関与や共育をめざしているのと同じく、高等教育でもたがいに触発しあって、現在の研究水準の一步上をめざす必要がある。大学教員が過去の研究業績という遺産だけで食っていける時代は終わろうとしている。学歴偏重社会から生涯学習社会に移行する段階で、教員の方も自己の文化遺産を急激な社会進展や学生の学習ニーズの時代的变化にあわせてリフレッシュしなければいけない時代になっているのだ。

そのためには、自らの教育内容についてまで学生に自由な感性と実感にもとづいて授業評価させ、大小の批判も含めてすべて受けて立つことが効果的であるし、また、それは刺

激的で楽しいことだ。ただし、その場合、教員は授業で学習者のように「学びたいことを学びたい手段で」学んでいるわけではないのだから、教員が学生集団のワン・オブ・ゼムであってはならない。そんなことでは学習援助者としての存在意義がなくなる。教育意図をもち、その意図する内容を公にすべきである。受けて立つということは、学生のニーズに追従することではないのだ。専門分野に関する過去の文化遺産や、現在の鋭い問題意識をフルに働かせて当たる必要がある。しかしながら、教員としての権力に頼ってもいけない。教員から学生への双方向教育は、ネットワーク型の異質間の水平交流でありたい。

◆ 転換３－いつ・どこ・だれ・なに型にする

生涯学習の理想主義的なスローガンとして「いつでも、どこでも、だれでも、なんでも」がある。大学でもこれをめざすことができないだろうか。

日本のある大学が米国に分校を開いたときの日本人学生向けのキャッチコピーは「アメリカ全土が君たちのキャンパスだ」というようなものだった。それならば、国内の大学においても学生に「君たちが学べる場は日本全土だ」といってよいはずだ。

また、米国の大学の「履修要覧」には各教員のオフィスアワーが載っているものがある。オフィスアワーとは、何曜日の何時ころにはいつもその教員が研究室にいるから、学生が個人でも質問や議論をしにきてよいというシステムである。このようなオープンマインド（学習者に対して開かれた心）が教員に求められている。

◆ 転換４－おもしろ・感動型にする

前述のように、ぼくは授業を勝負の場ととらえている。私たちは、雇用対策で大学当局に雇われているわけではない。自分にしかできない授業を売り物にしたい。現代社会は、テレビや出版などによって、おもしろくて役立つ情報が簡単に手に入るようになっているが、自分の授業が、メディアの流すそれらの情報より何らかの意味で勝っていなければならないと思う。なぜなら、本来、学習は学習者の自発的意思にもとづくものであり、学生が授業に出席するのも「今は他を捨てて授業を選ぶ」という学生自身の選択行為の一環であるべきだからである。だから、選択に堪えるものでなければならない。「我慢して出席しなさい」というのでは、忍耐力ぐらいいか育てることができない。

◆ 転換5－課題提起・解決型にする

学校での学習への導入が科目中心なのに対して、成人の学習は課題中心であるという（M. ノールズ）。初等教育などでも、同様の課題中心の教育がかなり普及しつつある。心と体の病いを治すのを援助してくれるのはお医者さんであっても、実際に治しているのは本人である（自己治癒力）のと同様に、課題を認識してこそ主体的な学習が成り立ち、それが自己教育力の発揮につながるのである。学生の課題意識を呼び起こさないままに教え込むのでは教育効果が薄い。

さらに、そこで呼び起こそうとする課題自体も、日常生活の事実に埋没するなかでは気づきそうもない、真実にふれる感動と気づきを与えるような深みのある課題でなくてはならない。

授業も社会教育というと学級講座のような集合学習である。そこでは、せっかく時空間を共有するのだから、同時代性のある授業でなければ、集合する意味がないし、学生も教師もおもしろくない。そのためには、学生に追従するのではなく、同時代に生きる者が直面している共通の課題を鋭く抉り出して提起する教育内容が求められている。生涯学習審議会答申の提唱する現代的課題の学習も、そういうことを意味しているのだろう。

◆ 転換6－生きがい創出型にする

高齢化にともなってライフプランづくりのための学習が盛んになっている。その学習は、より賢い生き方のためでもあり、より充実した生きがいのためでもある。時代がそういう学習を求めているのだ。また、学校教育でも、道徳教育はすべての一般教科に共通する課題だといわれる。しかし、自己の人生の内容とは遊離した過去の高等教育に慣れ親しんだ「まじめな」学生などからは、「人生を考えさせる授業」は反発を受けることがある。しかし、逆に人間の生き方を考えることから逃避しながら人文系の真実に迫ろうとすることのほうが無理なのである。「生きることを学ぶ」内容をめざしたい。

◆ 転換7－信頼・共感・癒し型にする

生涯学習時代は人びとの「モノからココロへ」という価値観の転換の反映でもある。また、学問の世界においても、経済学者がボランティア活動の意義を先頭切って論ずる時代になってきた。ぼくは、そもそも知的水平空間自体が本質的に支持的風土としての性格をもっていると考えている。学歴社会が崩れようとしているいま、大学の授業を受けようと

する学生の本音のところでの動機自体も、出世競争から幸福追求へと変化しているようだ。大学の授業をこういう「こころの時代」に対応させる必要がある。そういう授業のなかで生まれる信頼と共感の癒しのサンマこそが、真に自立した学習者を育てるのである。

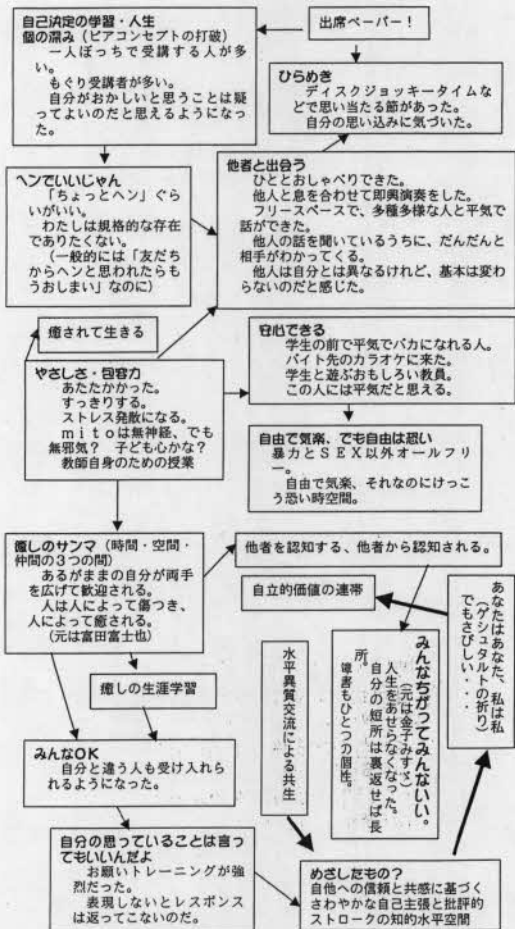
「共感の時代」

そこで、ぼくが、平成10年の春、音楽大学を去るにあたって、大学の授業の締めくくりに、2年間お付き合いいただいた短大2年生に「m i t o的授業の印象」に関する自分個人にとってのキーワードを一人一人出してもらってまとめた図を掲載する(図表2)。図を見てわかるように、そのほとんどが、態度や雰囲気に関することである。

図表2

図表2は、短大2年生から集められた「m i t o的授業の印象」に関するキーワードの集まりである。図表2は、短大2年生から集められた「m i t o的授業の印象」に関するキーワードの集まりである。図表2は、短大2年生から集められた「m i t o的授業の印象」に関するキーワードの集まりである。

図表2は、短大2年生から集められた「m i t o的授業の印象」に関するキーワードの集まりである。図表2は、短大2年生から集められた「m i t o的授業の印象」に関するキーワードの集まりである。図表2は、短大2年生から集められた「m i t o的授業の印象」に関するキーワードの集まりである。



図表2 mltoの授業の印象

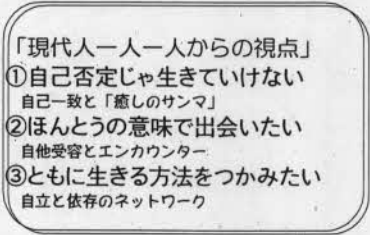
4. 大学でこんな楽しいことをやってもよかったの？

- 徳島大学大学開放実践センター公開講座「私らしさのワークショップ」における
双方向教育-

徳島大学大学開放実践センターが平成10年度に開始したばくの担当講座「私らしさのワークショップ」の各回のテーマと概要は次のとおりである（図表3）。

それぞれの回に対する受講した市民の反応（出席ペーパー）を通して特徴的なことは、「大学でこんな楽しいことをやってもよかったの？」というペーパーに象徴されるような、現代人としての市民一人一人の大学開放を通じた生涯学習への関心であり、とりわけ講座自体を「癒しのサンマ」の一つとしてとらえようとする信頼、共感、自立に向かう潜在的願望である。そこで感じられる市民のニーズは次のようにまとめられよう（図表4）。本章の最後に、平成10年度「私らしさのワークショップ」におけるカード式発想法の成果を掲げておきたい。これらは、それぞれ、「社会に役立つわたし」、「私がもらった『いい言葉』『いい影響』」、「わたしにとっての『私らしさのワークショップ』」というテーマに基づいて受講者がカードに自由に記入し、ばくが「対話」をしながらまとめたものである（図表5）。

これらの図は、市民への大学開放の新しい方向を示唆するものといえよう。

- 
- 「現代人一人一人からの視点」
- ①自己否定じゃ生きていけない
自己一致と「癒しのサンマ」
 - ②ほんとうの意味で出会いたい
自他受容とエンカウンター
 - ③ともに生きる方法をつかみたい
自立と依存のネットワーク

図表4 私らしさのワークショップに集う市民のニーズ

私らしさのワークショップの概要

現代人の生涯学習に向かう主要な動機の一つとしての「自分らしさ」の危機と、それへの願いを取り上げ、参加者一人ひとりの臨床的真実を引き出しながら、生涯学習、ボランティア活動、市民活動等の自己決定活動のあり方を明らかにする。

このワークショップにより、「笑い声の絶えない」「一人ひとりが自然にその気になる」ような成人の能動的な「楽習」を実現するとともに、地域のキーパーソンを育て、インターネットを通して、その成果を、大学や社会全体にアピールする。

私らしさのワークショップ！ ーみんな違ってみんないいー

私らしさってなんだろう。自分が学びたいことを、学びたい方法で、学びたいように学ぶ生涯学習が大切にされる今日、若者、サラリーマン、主婦など、たくさんの方が、生涯学習活動のほか、ボランティア、市民活動などの自己決定の生き方を味わっていらっしゃいます。

この講座では、ワークショップ方式を取り入れ、「もう、やってるよ」という人も、「ちょっと照れるぜ」という人も、対等の立場でいっしょに講座をつくっていき、楽しく学ぶことを通してワクワク、ドキドキしながら“自分らしさ”を発見します。さらには、その成果をインターネットで発信することも計画しています。

各回のテーマと要点

回	各回のテーマ	要点
1	私らしさってなんだろう？	自分さがしの相互承認の出会い＝第一印象ゲーム
2	コミュニケーションはキャッチボール	共感能力を高める＝ブレインストーミング（幸せの瞬間）
3	さわやかな自己主張	引っ込み思案をなおすコツ＝ロールプレイ（お願いトレーニング）
4	自分のためのボランティア	自分らしさを感じるとき＝価値観ゲーム＋スクエアゲーム
5	まとめ＝楽習の達人になる	自分らしさを表現する＝インターネットで発信！

図表3 私らしさのワークショップの概要

私らしさのワークショップII

一癒しのサンマ（時間・空間・仲間）のつくり方ー

私らしく生きたい。あるがままの自分が両手を広げて歓迎されるサンマ（時間・空間・仲間のサンマ）がほしい。生涯学習活動や、ボランティア、市民活動などの自己決定活動のなかで、そのような相互受容のサンマが、現代社会のなかで生まれつつあります。

この講座では、秋学期に引き続き、ワークショップ方式をとり入れ、癒される「楽習」（楽しく学ぶこと）のあり方を探っていきます。今回はそれを図解する作業を試みます。そこで作られた成果は、インターネットでも発信する予定です。

各回のテーマと要点

回	各回のテーマ	要点
1	私らしさってなんだろう？	自分さがしの相互承認の出会い＝第一印象ゲーム
2	コミュニケーションはキャッチボール	共感能力を高める＝プレーンストーミング（幸せの瞬間）
3	さわやかな自己主張	引っ込み思案をなおすコツ＝ロールプレイ（お願いトレーニング）
4	自分のためのボランティア	自分らしさを感じるとき＝価値観ゲーム＋スクエアゲーム
5	まとめ＝楽習の達人になる	自分らしさを表現する＝インターネットで発信！

図表3 私らしさのワークショップの概要

社会に役立つわたし

1999/2/2 私らしさのワークショップII カード式発想法成果

ほんとの和をつくりたい ← (人間関係が希薄なのはいやだから)

- (1) 地域と関わる。
子供会で廃品回収をしてリサイクルに役立っている。
- (2) まわりをきれいにする。
家のまわりのゴミは落ちてたら拾うようにしている。
- (3) 学校
PTAで学校のシステムについて考えている。

私たちの理想に向けて

- (1) ルールを守る(正しいか、間違っているか、は別にして)。
- (2) 面倒でも考え続ける(面倒だからといって考えることをやめたりしない)。
- (3) 次の社会をつくる。
子育てをしている。

売り買い (社会経済に役立つ・お金がもらえる・勤労・納税=現実社会一わかりやすい)

- (1) フリーマーケットをやること。
- (2) 物を買うとき。
- (3) バイトしている時。

わたしが生きてる価値

- (1) 気付く(ほかの人が気付いていないことに気付く)。
- (2) 残った体力を使う。
災害がおこれば身体の弱い人を背負ったり荷物をもってあげられるかもしれない。
- (3) 交通整理
交通渋滞等のトラブルが生じている時に処理している時。

もちつもたれつ

- (1) 自分が幸せな気持ちでいる。
- (2) 相手が少しでも喜ぶことをしたい。
- (3) 他人の好意はうけておく(うけたくないときは、うけないけれど)。
- (4) 寛容になる(相手の悪いところを気にしない)。

頼られたらがんばる 頼られたらがんばってみる(結果にはこだわらない)。

- (1) 相手に関心をもとう。
相手のことを思う。
相手の良い点を見つけてよこせる。
- (2) 話を聞く。
人の話を聞くことができる。
- (3) 相談にのる。
友達の相談にのる。
友人のグチに付き合っているとき(特に長電話)。
- (4) 相手もっているちからを引き出す。
CAPで子供たちのエンパワメントを引き出す、自分がエンパワメントされる。

図表5 カード式発想法成果

私がもらった『いい言葉』『いい影響』

1999/2/9 私らしさのワークショップII カード式発想法成果

肩の力を抜いていこう

- (1) 悪いことはいつまでも続かないわよ (夫が病気のとき)。
- (2) 心配してくれた、もっと楽に。
わたしが悩みを友達にうちあげ、その時何も言えなかった友達がくれた手紙で「がんばりすぎ、もっと楽に生きたら？ そんな私をみるのはつらい」と書いてくれた。
- (3) がんばらなくてもいいんだよ。
特に困っているときの「がんばらなくてもいいんだよ」。

今のあなたを認めます

- (1) あなたのままでいい。
自分らしく。いまのあなたでいいんだよ。
- (2) 母親としてもこれでいいんだと認めてくれた。
自分が気付いたときあらためてれば、母親はそれでいいんじゃない。
- (3) 落ちこんでいてもお前らしくていいよ。
自分の行動を反省して落ち込んでいるとき、友達から、「お前らしくていいんちゃうか」「そういう今のあなたがいい」。
- (4) 「らしさ」とらわれなくていいんだ。

その人の生き方にあこがれる

- (1) 人にやさしく自分にきびしく。
春風を以って人に授け秋風を以って己をいましめる (そうありたいと願っている)。
- (2) いや、楽しいですよ。
車椅子の奥さんがいる夫が「大変ですね」といわれた時、笑顔で「いや、楽しいですよ」と言っていた時。
- (3) 自分で決める生き方。
幸せは自分がきめる (詩の言葉)。

私がいればあなたがいる

- (1) 会えてよかった。
友達からの手紙に「あえてよかった」「誰よりも大切」。
- (2) 私がここにいるよ
あなたがたった一人だと感じた時、私はここにいる。
- (3) 親の良さに気づかせてくれた。
ホームステイした人が「あなたの両親は親切ですね」と言ってくれた時。

わかってあげる、わかってもらえる

- (1) 自分の気持ちを受け止めてくれた。
自分の気持ちを受け止めてくれた人と出会えた時。
- (2) 友達にぴったりの本。
何でもない普通の日に、友達から「いまの私の気持ちにぴったりの本、見つけた。はい、プレゼント」といって「MY FRIEND FOREVER」という本をくれた。

いまできることを

- (1) 成長には時期がある。その時に必要な学習がある。
格言＝彼岸すぎの麦の肥
- (2) 学生の特権
学生は神様の横に座っても許される (父が娘に)。

きれいになる

- (1) ステキに加齢。
30歳を過ぎたら自分の顔に責任を持つ。
- (2) しっかり勉強。
きれいになりたい人はしっかり勉強しなさい (女学校の先生から)。

図表5 カード式発想法成果

わたしにとっての『私らしさのワークショップ』

1999/2/16

私らしさのワークショップII カード式発想法成果

なぜか楽しい

- (1) 毎回楽しかった。
- (2) はじめは受講の日をよく忘れたが、あとからは楽しくなり、行こうと思うようになった。

でも、もっと緊張も

期限がないこととか裏講座をやってくださったりすることをありがたいと思うのですが、私の特性として（普段緊張を欠いているから）、講座そのものの密度が薄く感じるというか、散漫になるように思えた。

箱入り「娘」にとっての新鮮さ

講座を受ける前の自分は家族を通してしか外の世界を知らなかったから、とくにフリースペースなどで自分自身で得たいいろいろな情報はとても新鮮だった。

一方通行ではなく両面通行

講座の間、自分のペースではありませんが、頭を働かせたのではないかと思います。双方向の授業だったかしらと思います。

ふだんは考えないことを考えた

- (1) ふだんは気にも留めないことなのに考えた。
ふだんあまり気にもとめないようなことを考える時間を与えてくれる場所。
- (2) ことば一つをきちんと考えた。
ことば一つでも常日頃は考えて使わない。ワークショップは考える勉強になるし、他の意見が聞けて考えが広がる。

かざらなくてもいいんだよ

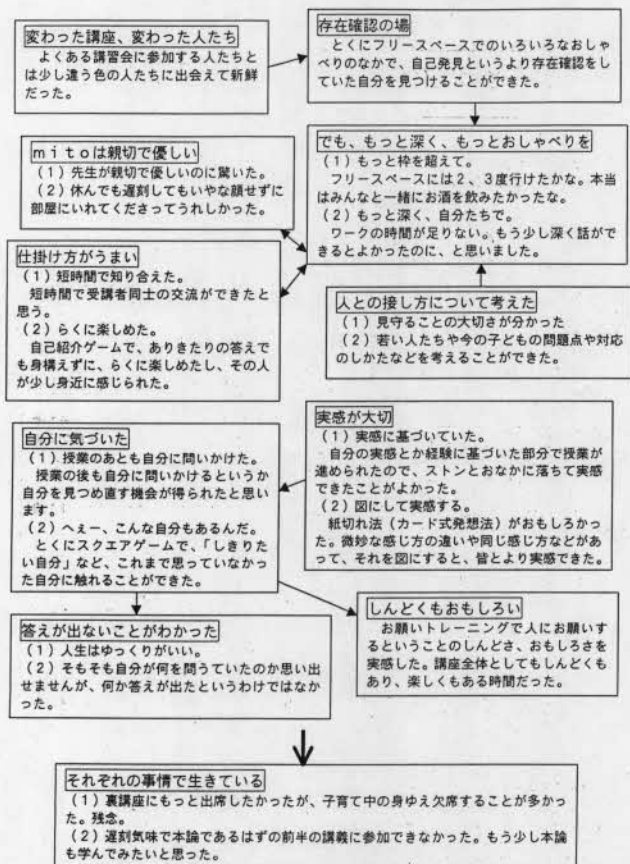
- (1) 言える場になっている。
参加の方たちがいつも本音で発言されているのがいい。
- (2) スッと気軽に話せる。
フリースペースでみんなの話を聞いていると、講座では話せなかったことをスッと気軽に話せたと思う。あんな感じの集まりって私には経験がなかったから、とても充実して楽しかった。
- (3) 肩の力を抜いていられる。
気を使わなくてもいい。

違うからよかった・同じで違う・違って同じ

- (1) 視野が広がった。
1つのテーマで話し合っても、みんなそれぞれ考え方も主張の仕方もちがっているので視野が広まったと思う。
- (2) 聞ける、言える。
いろいろな人たちの話が聞けてよかった。
自分と全く違う立場の意見や考えが聞け、また自分のことも言える場所。
- (3) 人ってそれぞれ違うんだ。
人ってそれぞれ違うんだとわかっていて再認識したワークショップだった。
- (4) 立場や年齢の違う人のなまの心情
立場の違う人のなまの心情を知り得たのは有意義だった。年齢の幅があって考えが違っていたり同じだったりして刺激があった。
- (5) 「同じ」のゆらぎがよい
「違う」の向こうにある「同じ」のゆらぎがよいと思う理由ではないか。何もかもまったく違う者は、理解も共感もできないのではないか。

感心感動がいっぱいある所

図表5 カード式発想法成果



図表5 カード式発想法成果